

---

# デコレーション

とれんと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デコレーション

### 【Nコード】

N3160H

### 【作者名】

とれんと

### 【あらすじ】

デコレーション機能によって、さまざまな姿をとれる近未来。そんな機能を破ることを生業とする少年の物語。

風鈴が鳴った。

暑い部屋では、下着姿の少年と少女が拳銃を向けあっていた。

「どうした？」

汗をながしながら、連戸れんとは言った。

「あんたこそ、どうしたの？」

風華ふうかは微笑みをたたえて言った。

「きりがないな」

「そうよね」

「でていけ」

「いわれなくとも」

風華は拳銃を下げると服を着た。そして、デコレーションモードをオンして、姿を変えた。

玄関からであると、隣の部屋に住んでいる中年男性にぶつかりかけた。中年男性は、おもわず、相手を見つめた。理想の容姿をしていたのだ。風華は一瞥もせず、二階の階段から、道路に下りていった。連戸は叫んだ。テレビ台を思い切り蹴る。木製のそれに、穴があいた。

「派手だな」

言ったのは、いつのまにか居間に入ってきていた、巨大な熊のぬいぐるみだった。

「ああ、黒兎くろとか」

連戸は不機嫌そうに言った。黒兎について彼に知っているのは、いつも落ち着いているということだけだった。本名も性別も年齢も知らない。ウサギなのに、熊の理由もしらない。

「悔しいときは、仕事をしよう」

熊は言った。

「ここらにあるか、目当てのやつが」

連戸は服を着た。そして、デコレーションシステムを立ち上げる。青いモヒカンでトリの頭になり、身体は筋張り、タンクトップにハーフパンツという姿だった。いつものデコレートだ。

いや、ここから一時間ほどだが。北南病院のそばのマンションだ。デコレートしまくりだから、システムに食い込めば、かなり揺するぞ。

「なるほど。じゃ、今夜いくか」

「ああ」

言って連戸はテレビをつけた。

新型のデコレーションツールの特集をしていた。相手の。好みに印象づける介入型の人間デコレートツールだった。

そういえば、風華もていたと、連戸はおもいだした。

しばらく、二人は部屋でお茶をのんでいた。熊も鳥も、自然にコップに口を付けていた。

携帯が鳴った。甘いメロディーだった。連戸のだ。

着信を見ると、風華からだった。

「もしもし？」

「おねがい・・・助けて・・・」

か細い声だった。

「どうした？どこにいる？」

「家」

「わかった」

連戸は立ち上がった。

「そろそろ。時間だぞ」

黒兎は言った。

「なに、すぐだ」

黒兎は連戸の後についていった。

ハイドロを積んだ車に乗り、国道を走った。

二十分ほどで、マンションについた。

風華の部屋は明かりがついていなかった。インターホンを押す。

だが、反応はない。

連戸はスペアキーでドアをあけた。

「おいっ！」

すぐに照明をつける。どこの部屋にも、彼女の姿はなかった。

「どこだ？」

いって、風呂場をみると、そこに彼女は俯いて座っていた。左腕を入れたバスタブの湯は赤く染まっていた。

「風華っ!？」

「ああ、連戸……」

「待つてる、救急車を呼ぶ」

「……それより、ここにいて」

風華は言った。

「だめだね。連戸はこれから、仕事だ」

「どこで……?」

「北南ハイツだ」

「知ってるわ……有名なデコレーションシステムをもっている人ね。有名だわ」

顔色の悪い風華はぼそぼそと声をだしていた。

「そんなことより、病院だ」

サイレンの音がする。

それは家にくる少しまえに消え、救急車が到着した。

「北南病院に」

連戸は言った。今夜中に寄れるとおもったからだった。

「もっていけ」

彼は声を潜ませると、机に入れてあった拳銃をわたした。

風華をのせた救急車はサイレンをならして、走っていった。

「さて、いくぞ」

黒兎は言った。

「おう」

自動車はスピードを上げて、街道を走っていった。百キロを超え

て走ると、不安定なタイヤがスリップをおこした。そのまま、街灯に突っ込んだ。車のボンネットは完全に凹み、ガラスが割れた。

「くそ・・・」

連戸はドアを蹴破ると、道路にでた。重みに似たひどい疲労がする。頭痛もする。

「やつちまったな・・・」

黒兎がはい出して来て言った。

「あと、どれぐらいだ？」

「ああ、ここまでくれば、あとは十分程度だよ」

「警察が来ないうちに、退散しよう」

連戸は言った。

彼らは裏道にはいった。

「車の分も奪ってやるか」

連戸は言った。

「ここだ」

黒兎が言った。

三十階建てのマンションだった。

オートロックの前で、パネルの番号を適当に押す。

「伊切通運いぎりのものです。お届け物をもってきました」

「はい、どうぞ」

扉はあけられた。

めざすは、最上階だった。

エレベーターに乗り一気に昇る。

到着すると、ドアのまえで、インターホンを押す。

反応がない。

ドアの鍵は、開いていた。

ふたりとも、迷いもなく突入する。

「なんだ、これ・・・」

そこにあっただのは、大量の機械類だった。

「ようこそ」

声が出た。強制介入を喰らった。何者であるか、走査される。

黒兎が悲鳴をあげた。もがく姿のデコレートは、モザイク状になり、熊の姿が消えた。そして、黒兎も消えた。

「どうしたっ!？」

連戸も凄まじい介入に抵抗していた。

記憶がよみがえる。ぶつかった車の助手席に十代の少女がダツシユボードで頭を割っていた。彼女は、もういなかったのだ。

ひどい頭痛がする。頭から血がながれてきた。肋骨に激痛がはしる。

「くそっ!」

連戸は部屋からでた。デコレーションはかき消えて、本体が、さらされていた。

彼は外までくると、疲労感で階段に座り込んだ。

「連戸」

声が出た。風華だった。デコレーション機能をつかった姿は、美しかった。

連戸が黙っていると、彼女はその後ろにすわり、腕を首に巻いてきた。

「まっつたわ」

風華は連戸のこめかみに拳銃を突きつけた。

「一緒に暮らしましょ、連戸」

撃鉄が起こされた。

おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3160h/>

---

デコレーション

2010年11月8日15時46分発行